国内唯一のシンバルメーカーの挑戦

青銅製シンバルで究極の響き

奥行きのある響き、幅広い響き、やわらかな響き、クリアな響き…。シンバルのサウンドは、意外と繊細である。ましてプロを満足させるクオリティとなれば、なおさらだ。そんな高いハードルに挑み、国内唯一のシンバルメーカー・Koideとして厚い信頼を得ているのが(株)小出製作所だ。そもそもは軟鋼、ステンレス鋼、アルミ、銅などの金属板を、様々な形に冷間一体成型する加工メーカーとして、医療・通信機器、家電、車両部品などを製造している。それがなぜ楽器・シンバルのオリジナルブランドに挑戦したのだろう?

「一九六〇年代のグループサウンズ全盛時に真鍮製の低コストシンバルを、一九八〇年代にはティンパニーの躯体など、多くはありませんが、楽器の製作は手掛けていました。この頃に入社してきたアマチュアドラマーの若い従業員が〝ぜひ本格的な青銅製のシンバルづくりにチャレンジしたい〟と提案してきたのです。これがすべての始まりでしたね」と、代表取締役の小出俊雄氏は振り返る。

シンバルの有名ブランドは、アメリカとスイス。これに対抗できるクオリティを実現するために、様々な試行錯誤を繰り返してきた。「実は、最初はシンバルの材料が何かすらよくわかっていませんでした」と苦笑いする小出氏。そこで三菱マテリアル(株)に依頼し、材料を分析してもらったそうだ。そして辿り着いたのが、銅と錫の合金比。現在、二つの比率の素材を使用している。

「銅92%、錫8%と軟らかくよく伸びる素材は、エレキギターなどを使うポピュラーやロックなどで人気があります。ジャンルを問わず使われているのは、銅80%、錫20%の硬い素材です。この素材は丸板で輸入していますが、錫の量が場所によってまちまちで均一ではありません。しかし、これが逆に複雑な深みのあるいい音を創り出してくれます。どの音楽にどの比率というよりも、これはミュージシャンの好みの問題ですね」。

シンバルの材料として使用する金属板は、圧延方向が一方向で作られているため、90度異なる方向には伸びにくい。このズレを修正していく加工作業が、なかなか大変なようだ。

ではシンバル製作の工程を見てみよう。まずは、青銅板を任意直径の円盤にカット。次に中央のカップ部分を絞り加工する。それから機械ハンマー、手ハンマーで表面を叩き、また表面を削って音溝加工を施す。ここで生まれる微妙な凹凸が、シンバルの振動に変化を付け、音に表情を与えていく。音にこだわりのあるミュージシャンからの細かなオーダーにも、こうして一つひとつ手作りで応えている。

「この盤面へのハンマー打ちに最も苦心しています。叩き過ぎてもダメで、いい加減が難しいですね。当社の商品は、すべてが手作りなので、全商品がオリジナルのようなものです」。

使用する大小の機械ハンマーは、小出氏が工夫を重ねて、独自に設計・製作したものだ。また、銅は生き物と一緒であり、銅と錫の比率の違いによる音の変化にもまだまだ研究が必要だという。

「もっと錫の含有率が高く、硬いものを求めて、素材メーカーに検討をお願いしています」

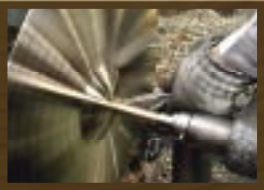
シンバルの需要は、あらゆるジャンルのミュージシャンが集まるアメリカがNo.1だ。当然、求められるサウンドは人それぞれに違い、そのクオリティも高い。一人ひとりが求める世界一のシンバルを作り出すことが、アメリカでの評価につながる。そのために、小出氏は、今日もそれぞれの理想の音づくりに、試行錯誤を続けている。

アマチュアドラマーである従業員の提案から本格的なシンバル製作がはじまった

代表取締役 小出 俊雄氏

材料となる青銅製丸板

中央のカップ部分を絞り加工する


表面に音溝を加工

機械ハンマーによる叩き

株式会社 小出製作所
〒547-0006
大阪市平野区加美正覚寺1-22-32
Tel:06-6791-1824